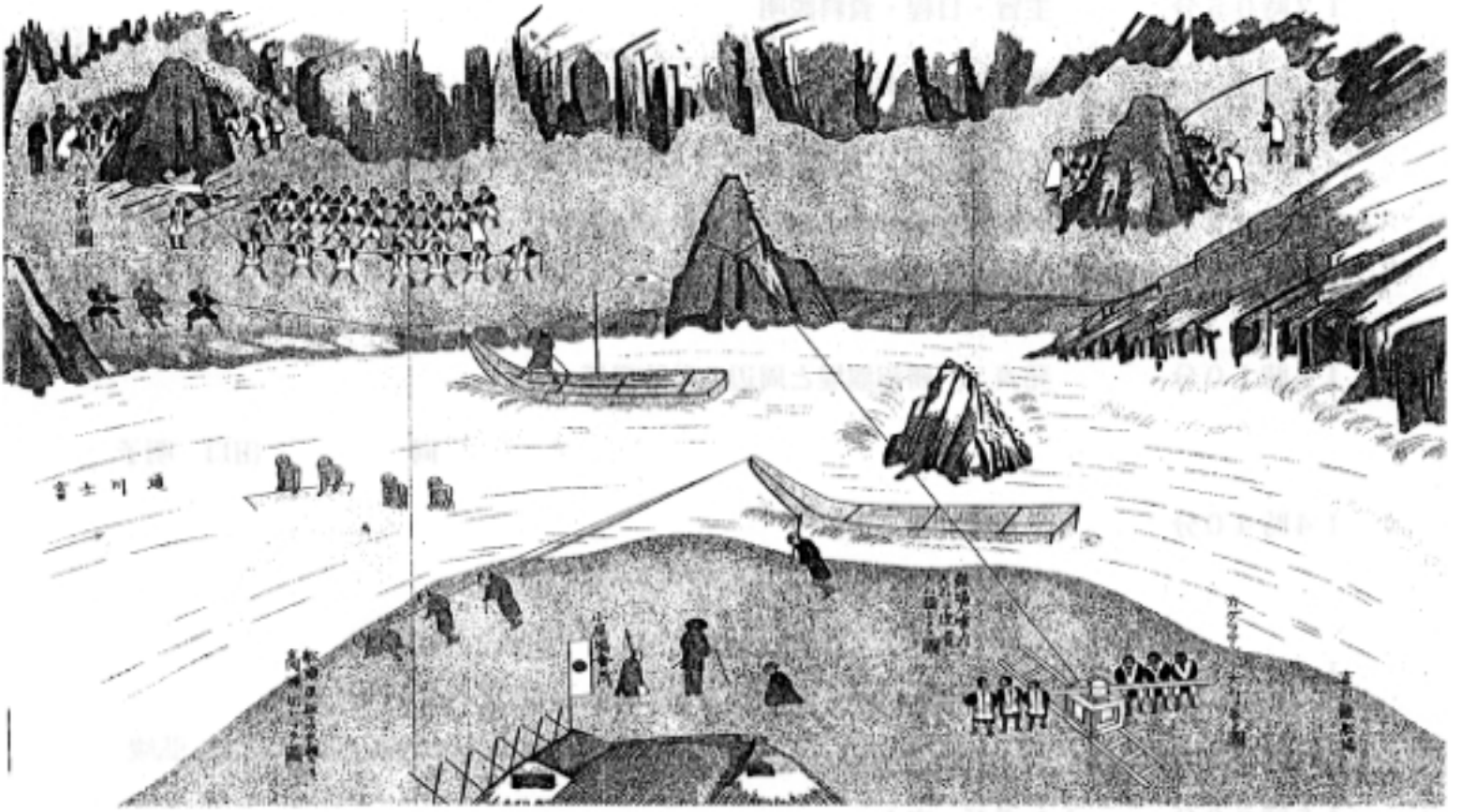
平成１７年度　山梨県埋蔵文化財センターシンポジュウム

再発見！川がつなぐ山梨の歴史

富士川舟運・勝沼堰堤が語る川と人と土木技術

資　料　集



日　時	平成１８年２月２５日（土）午後１時から４時
場　所	山梨県立図書館講堂
次　第	開会挨拶・主旨説明等
	発表１「富士川舟運の拠点　鰍沢河岸跡」　埋蔵文化財センター　村石真澄
	発表２「富士川舟運の発展と普請工事」　同　芦澤昌弘
	発表３「勝沼堰堤と周辺の砂防設備」　同　田口明子
	【休　憩】
	発表４「山梨の治水土木技術」　大門・塩川ダム管理事務所長　二木弘峻
	シンポジュウム　コーディネーター　埋蔵文化財センター　末木　健
	閉会挨拶

日程の御案内

１３時　　開会挨拶

１３時０５分　　主旨・日程・資料説明

１３時１０分　　発表１「富士川舟運の拠点　鰍沢河岸跡」

埋蔵文化財センター　村石　真澄

１３時４０分　　発表２「富士川舟運の発展と普請工事」

同　　芦澤　昌弘

１４時１０分　　発表３「勝沼堰堤と周辺の砂防設備」

同　　田口　明子

１４時４０分　　【休　憩】

１４時５０分　　発表４「山梨の治水土木技術」

大門・塩川ダム管理事務所長　　二木　弘峻

１５時２０分　　シンポジュウム

コーディネーター　埋蔵文化財センター　末木　　健

１６時　　閉会

富士川舟運の拠点「鰍沢河岸」

村石眞澄

1. おびただしい石垣の存在

a. 地中に石垣が埋没している
b. 御米蔵跡の石垣
c. 対面する石垣

2. 鰍沢文政大火（1821年）

a. 熱を受けて変質した磁器
b. 市川大門村の押切への河岸移転構想も持ち上がる
c. 江戸の勘定奉行の御白須へ

3. 埋没石垣

a. 川と折り合った暮らし
　堤防建設計画変更
b. 銭貨と泥めんこ
　自然の力を直接的に利用して生活する人々の願いを伝える

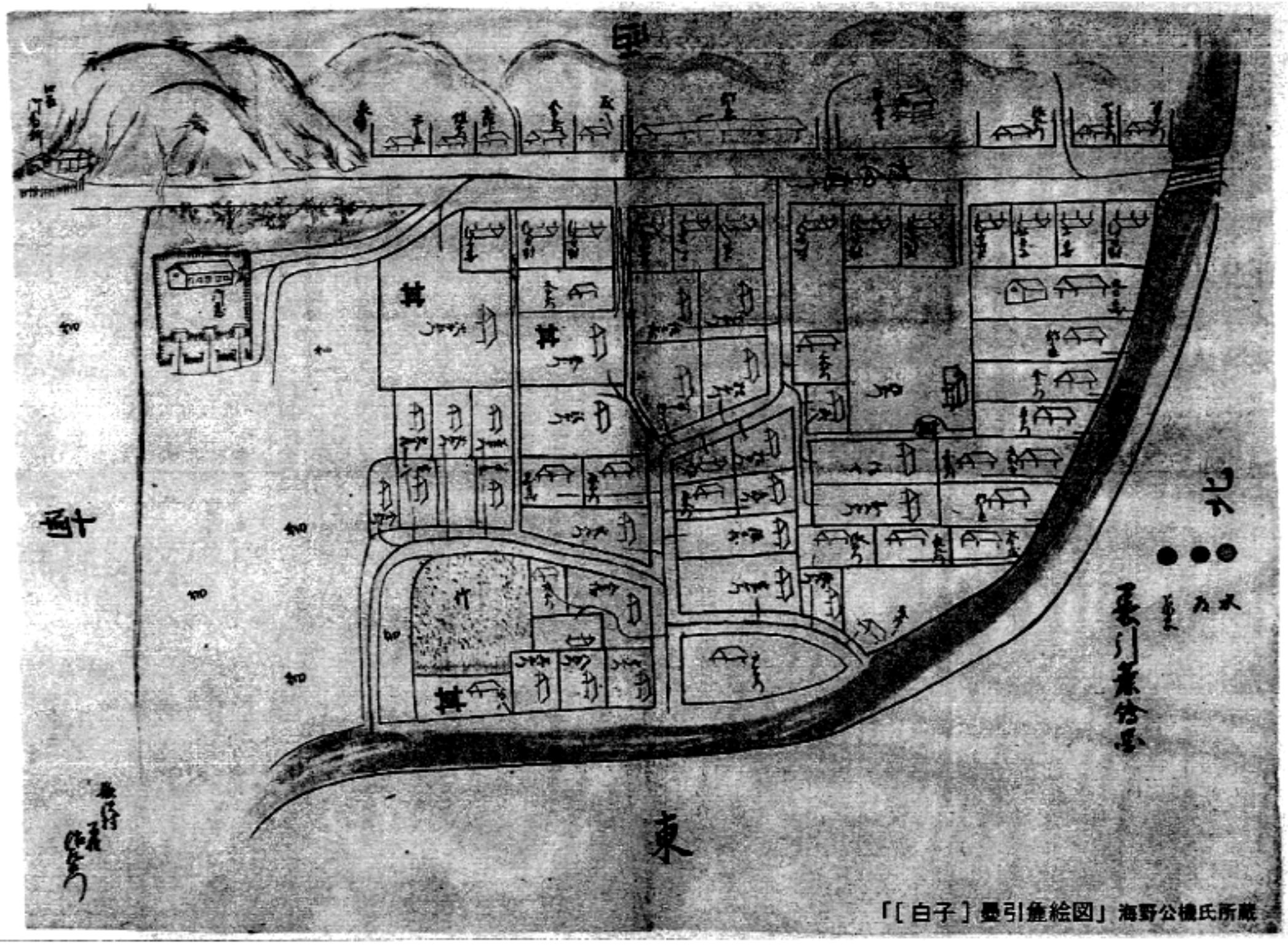
4. 兎の瀬と鰍沢河岸

a. 洪水砂の堆積
b. 富と水害をもたらした兎の瀬

鰍沢河岸跡平面図

1 : 500

2006/ 2/20



「[白子]曇引鯉絵図」海野公機氏所蔵

文政4年鰍沢大火に関する資料　旧版鰍沢町誌　富士川水運史資料　P892

九月廿日御呼出し

御奉行遠山左衛門尉様

御勘定御懸り　山島勇助様

木戸与左衛門様

郡中村々惣代、上津村次郎左衛門、中楯村源兵衛、差添人正徳寺村六郎左衛門、鰍沢村名主長蔵、岡屋弥市右衛門代六兵衛、一同御白須御呼出し

御前仰せられ候は、郡中村々惣代上津金村次郎左衛門、中楯村源兵衛、差添人正徳寺村六郎右衛門その方どもの儀、鰍沢村とこれまでおおよそ弐百年御建ておかれ候郡中御米詰蔵当春類焼致し候に付き、村々難儀の申し達し後難安心つかまつらず、市川大門村へ更地いたしたく旨、願出し候に付き、もっとも支配よりもそれぞれ何い書もこれあり候えども、なおまたひと通り申し上げよ、と仰せ聞かされ候、

郡中村々惣代ども恐れながら申し上げまする、鰍沢御廻米詰め御蔵当正月類焼仕り、右御蔵場の儀は地窪手狭民家より御蔵の間一四、五間ならでは離れ申さざる、家居千軒あまりも建て続きこれあり、ことに甲州の儀は高山屏風のごとく建てまわし、富士川水同様に鰍沢御蔵場所へ北風御廻米時分には国中の風吹き込み、非常の節も一方の口にて防ぎがたき後難安心つかまつらず、よって鰍沢より北の方に壱里離れ、市川大門村地内に十町あまりも離れ、小高きところに御蔵場所宜しくこの場所へ替地いたし候えば、火災のごときもこれ無く、郡中一同安心仕り候由申し上げ候、御前仰せ聞かされ候は市川大門村の儀は河岸場稼ぎ等これまでいたし候場所や、郡中惣代答えて、左様なるの儀はこれなしと申し上げ候。

御前またまた仰せ聞かされ候は、鰍沢河岸おおよそ二百年もあり来り、河岸場稼ぎて多人数栄え、容易に地替えと申す儀は成らざることとおれはおもふ、鰍沢御蔵当春類焼は天災の事、これまで所々に右様成るの儀これあり□替地いたし仰せ聞かされ候、よってよくよく勘弁いたし候ように仰せ渡され候、御前仰せ聞かされ候は、鰍沢村名主長蔵、岡屋弥市右衛門代長百姓六兵衛その村御註蔵の儀、郡中村々惣代をもって市川大門村へ地替えいたしたく旨相願い、その方どもの儀、右場所へ地替えいたされ候ては難儀の趣、ひと通り申し上げよ、

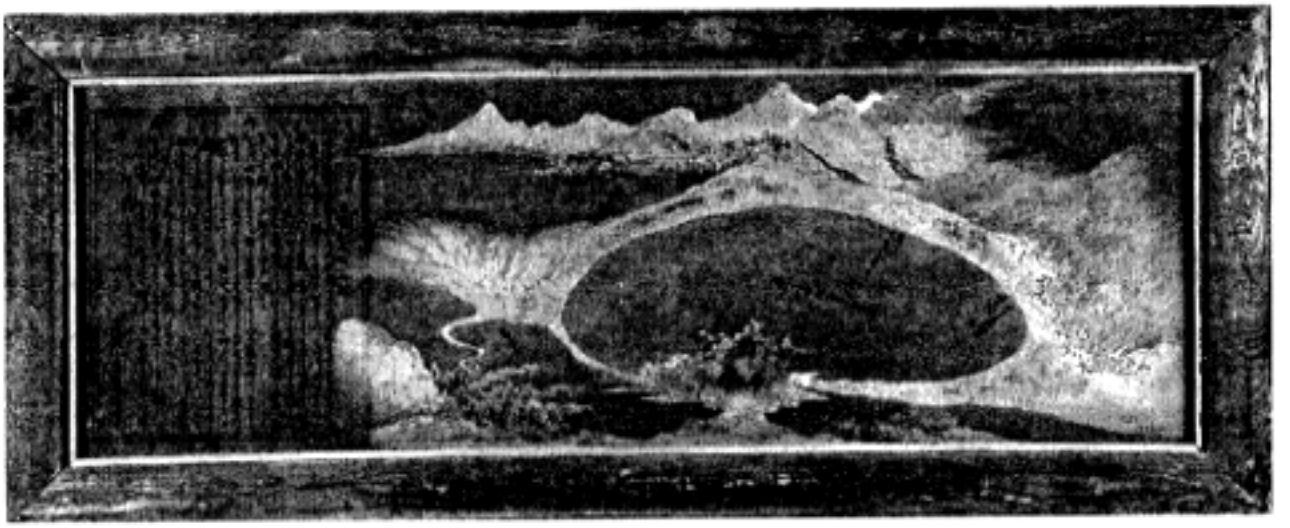
恐れながら申し上げます、当正月十六日夜半ごろ壱町半ばかり北の方、家込みのところ六左衛門と申す者の薪小屋より出火いたし、藁屋根家続き、おりふし北西の風はげしくふきたたき候間に御蔵屋根へ火の子燃え付け、私ども身命の限り防ぎ候へども、消し留めがたく大切の御米ならび御蔵そのほか詰所等まで類焼に及び候段、重ね重ね恐れ入りたてまつり候、ことに焼失米郡中にて弁米に相成り候ように成り行き、郡中へも何れとも気の毒に存じ、跡御普請これまでの通り藁屋根にお願い申し上げ、河岸冥加役に瓦屋根にいたし、なおまた郡中入用をもって普請いたしきたり候、御出役御詰所御検使場郡中休足所右三ヶ所へ屋根ばかりは瓦を助け合わせ、なおまた御蔵への間三拾軒ほどもこれあり、民家御蔵へ近辺取り払いたくは存じたてまつり候えども手狭地詰の場所、替地これ無く私ども相談にては行き届きがたく民家取り払い候の儀は御賢察願い上げたてまつり候

御前もっともなり、申し分ずいぶん聞き合わせよと仰せられ、その方どもも宜しく勘弁いたせとおいおい吟味申し立てると仰せ渡され候

川がつなぐ山梨の歴史「富士川舟運の発展と普請工事」

芦沢昌弘

1．鰍沢七面堂絵馬掛額



「水行難場有形図絵」『七面堂掛額』（鰍沢町教育委員会）

□　『水行難場有形図絵』

「連々寄洲になりて高くなるの図」
「難場人喰み石と云」
「玄石難船場岩洞の図」

「富士川挽舟の図」『甲斐叢記 巻之四』

2．富士川舟運の発展

□　舟運の開始

京都の豪商角倉了以による富士川開鑿
慶長12年（1607）説が有力
甲州鰍沢から駿州岩淵まで74km
当初は年貢米を江戸へ廻米する政治的必要性があったため
商品経済の進展にしたがって甲州の物流の大動脈に

□　舟運での輸送

「下り（駿州へ）」（3～4時間）　御廻米（年貢米）・農産物など　＋　乗客
「上り（甲州へ）」（4日間）　塩・海産物・砂糖・瀬戸物など
※鰍沢で下ろされた塩は「鰍沢塩」として、甲州はもちろん諏訪・伊那方面へも販売された

□　三河岸

鰍沢河岸・黒沢河岸・青柳河岸

3．舟運を維持するための普請工事

□　舟運の難所

『甲斐国志』

・天神ヶ瀧（箱原）、馬の面石（切石）、博奕穴（下田原）、屏風岩（宮木）、鼠石（和田～大島）、小豆石（十島）、木釜（瀬戸島）、銚子ノ口（瀬戸島）、むじなヶ瀧（瀬戸島）

□　上流部最大の難所「天神ヶ瀧」

『甲州道中記』慶応２（1866）渡江庵翠風

「天神ヶ瀧に来り左右の岩の中船走り通る時、岩と船とにせかれ水煙り七八尺立時、笑い居たりし船頭青くなり。さてさて恐ろしき川なり、何程水練を得たり共、此早瀬に中々およぐ事いたしがたし、水中へ入れば岩角にからだをうたれたる時はみぢんになるべし…私も所々へ参り川の難所見物致候へ共、是程の大難所なし、虚の人日本一と申候が実に誠なり」

『松亭身延紀行』万延元（1860）松亭

「ここに至つては、船中ただ死を去ること一寸のみ、或いは題目を高声に唱えるあり、又経文を開いて読誦するもあり」

□　文化14年天神ヶ瀧難船除工事

『水行直仕形図絵』

近くの谷沢の大石を運び、人喰い岩を埋め潰す

「大石ヲ取出図」

「大石をうかちて丁場へ出す図」

「カクラサンニテ大石ヲ巻ク図」

「難場人喰ミ石ヲ大石ニテ埋潰シ大石積トナス図」

「船頭共板ヲ以水ヲせきり高洲を切ひらく図」

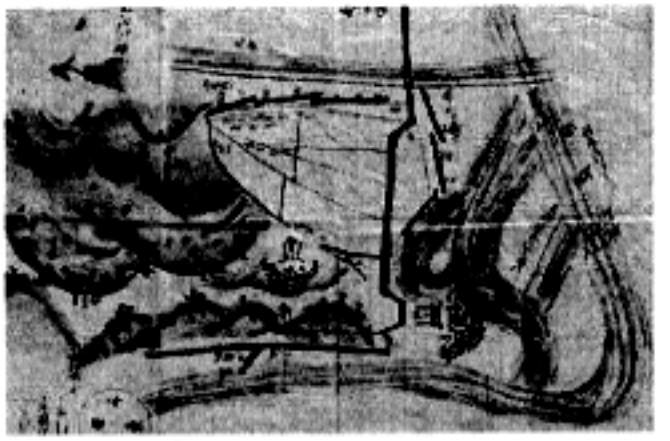
文化十四年富士川通天神瀧字玄石水行御普請出来形帳（箱原区有文書・鰍沢町指定文化財）

「水行直仕形図絵」『七面堂掛額』（鰍沢町教育委員会）

（参考２）天神ヶ瀧難所の原因

『原田家文書（鰍沢町誌より）』「諸事御用向日記控」　文化13（1816）
「天神滝げん石切取
御代官様上飯田御陣屋　町野惣右衛門様　宝暦七丑年御普請箱原村へ被仰付候事
一　文化十三年丑八月
大風雨ニ而天神滝難場ニ罷成三河岸並箱原村初鹿嶋村別々願書を以奉願上候処御勘定様御義大井勘左衛門様御懸り御目論見高津八之丞様小俣信一郎様被遊候而江戸御帰陣被遊漸々極月に入御出被遊候而
十二月十日
　御普請方　高津八之丞様
　　小俣信一郎様
　御帳はり被遊候　尤両村三河岸立会罷出候」
※文化13年に大雨出水があって天神ヶ瀧が難場になったため、文化14年に天神ヶ瀧の大普請工事が行われた

『箱原区有文書（判読したもの）』
宝暦5（1757）
箱原村の村役人より上飯田代官所への書状　「差上申一札之事」
「…当村分柳川之義八沢々前込之岩川ニ而大石押流申候荒川御座候藤川之義八瀬向悪敷罷成候節八向之岩之はね出しニ而天神之瀧前込申候場所ニ御座候…」
※大柳川は大石の押し流れる「荒川」であり、富士川は天神ヶ瀧のあたりで「前込」になる


天神ヶ瀧難船場の図（箱原区有文書・鰍沢町指定文化財）

大柳川が大雨のあとに大量の土砂を吐き出し、富士川が大きく湾曲している天神ヶ瀧に土砂がたまり、難所となる構図が推定される

引用・参考文献

北垣聡一郎「水行直仕形図絵について」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第235集　鰍沢河岸跡Ⅲ』（2006）
村石眞澄「鰍沢河岸跡をとりまく環境」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第224集　鰍沢河岸跡Ⅱ』（2005）
郷土出版社『定本　富士川』（2002）
鰍沢町誌編さん委員会『鰍沢町誌』（1996）
山梨県教育委員会『山梨歴史の道調査報告書第19集　富士川水運』（1991）
甲斐叢書刊行委員会『甲斐叢書　二巻』（1975）第一書房
甲斐叢書刊行委員会『甲斐叢書　四巻』（1975）第一書房

『文化十四年富士川通天神瀧字
玄石水行御普請出来形帳』

施工者：
三河岸・箱原村・羽鹿嶋村

延べ労働人数：36898人

工事期間：
文化13（1816）12月中旬～文化14（1817）2月中旬まで二ヶ月間

作業に従事した人々：
御普請役人・三河岸船頭・石工栄蔵ほか十九人

右難船場碑記

富士川通箱原村地先羽鹿嶋村地内字天神カ滝玄石一名うなきか淵と唱へ常に水青く滝まきて其深さを量り知るものなし若此玄石へあやまちて舟を乗あつれば反的に舟は粉ナ粉ナとなり人船ともに岩洞へ吸込れ助命するものなし誠に物すごき有様也往来乃人の知る所也
尤川通において第一の難船場なるによりて三河岸外両村よりねかひ奉りて漸く文化十二丙子師走
御仁恵の大命を蒙り即既に其役にあたれり仍而難船場除の工夫を日夜朝暮に疑し与風おもひあたりて右場所ちかき谷澤々の大石を採出す事を得たり扨上ての川にありし妨の人喰ミ石を埋潰し大石積となしなハ幾かふちの千尋の丈けも洲にて押しきりつらんとはかりて師走中旬より発工せしめ二六時中丹誠を望て精身をつみしに天幸とはいふへけれ来て翌丁丑二月中旬まてに其功なりぬさてかしか澤に住める栄蔵石工たりしかワカ年にすきて其働き数多殊勝なり人々此ひとの
御仁恵は勿論玄石難船場といふは已来名のみとなりて往々は人々忘るる事もあらめと其名の碑を建て萬代の宝の銘とはなせり

丁丑仲春二十有余日　　江府　　高津八之丞藤原久盛撰書
印　印

□　文化14年天神ヶ瀧普請工事後のようす

『水行難場有形図絵』「右難船場碑銘記」
「・・・玄石難船場といふは已来名のみとなりて往々は人々忘るる事もあらめと其名の碑を建て萬代の宝の銘とはなせり」

『甲斐叢記』嘉永2（1849）大森快庵
「天神宮箱原村」の項に
「天神瀧と云舟行第一の険難なりしが今は河道東へ轉りて稍平夷なりといへり」

□　甲州の物流の大動脈であった富士川舟運は保守管理のための普請工事とそれを支える治水土木技術によって維持されていた。

（参考1）繰り返された天神ヶ瀧普請工事

『箱原区有文書』（鰍沢町指定文化財）より抜粋

1757（宝暦7）	『天神ヶ瀧井南側岩切御普請村請質地証文』
1802（享和2）	「…富士川通天神岩下　一　大聖牛廿組…」
1817（文化14）	『富士川通天神瀧字玄石水行御普請出来形帳』
1838（天保9）	『富士川通天神ヶ瀧水行直御普請出来形帳』
1845（弘化2）	「…天神ヶ瀧森上江今般手厚之大石積定式御普請被仰付…」
1860（万延元）	「…天神ヶ瀧瀬浚之義…」
1869（明治2）	『天神ヶ瀧瀬浚御普請人足坪懸書上帳』